会員寄稿

秋工在学中の思い出

高橋　光男
（昭和27年電気科卒）

【長期の在学】

私は秋工に六年間在学しました。そう聞くと、大方の人は直ぐに「落第」の文字が頭に浮かぶと思いますが、決してそうではありません。終戦直後、1946(昭21)年前後に旧制の中等学校に入学した人は、皆同じ経験をしている筈です。1947(昭22)年、学制改革により義務教育の六・三制が導入されたためですが、その間の事情については、本誌2015年Vol.23号に掲載された加賀谷健治氏の記事「戦後70年秋田工業を巡る終戦前後」に詳述されております。

私も旧制秋田工業学校に入学した筈でしたが、翌年突然に秋田工業高等学校併設中学校二年生ということになりました。この中学校は学制改革の申し子のようなものでしたから、新入生の募集はありません。従って、私達1946年(昭21)入学生は旧制秋田工業学校最後の入学生であり、新制秋田工業高等学校併設中学校の最後の卒業生という、奇妙な立場におかれることになりました。

この事が学校生活にどのような影響を与えたのでしょうか。細部については私ももう記憶にありませんが、最大の関心は新制秋田工業高校に自動的に進学できるのかということでした。形式的には一般の中学ですから、改めて入試を受けなくてはならないのではないかと言う疑問です。その辺は、当時行政的には解決されていた(無試験で進学できる)のだと思いますが、先生の中には「お前達の今の成績ではとても高校には進めない」と脅す先生もいて、不安に曝されました。高校では新入生も沢山入ってきたので、生徒数は一挙に増えました。同じ同級生でも、六年在学経験組と、外部から入試を経て高校に入学し、三年間だけを共に過ごした人が混在することになります。

六年在学組は、四年間最下級生を努めなければなりませんでした。当時、さすがに上級生による鉄拳制裁は少なくなっておりましたが、それでも上級生の権威は絶大で、運動部などに属していた人は大変だったと思います。

6年間在学して良かったこと。たっぷり秋工精神を叩き込まれたこと(現高校生の２倍)はともかく、社会情勢が不安定で世の中が目まぐるしく変化する時代に、比較的落ち着いた環境で過ごせたことかと思います。ラグビーの黄金時代も十分に味わいました。1947(昭22)年から1949(昭24)年までの全国大会三連覇、1950(昭25)年の準優勝を挟んで1951(昭26)年の優勝と、六年間高揚した気分を持続して学生生活を送れたのは、1946年入学の我々だけではないかと思います。この経験が卒業後も大きな励みになりました。

【山本勇先生のこと】

私は父子二代秋工出身です。父慶之助は明治43年機械科(当時電気科は未設立)を卒業後、早稲田大学理工学部に進み、芝浦製作所(後の東芝)の技師をしておりました。

住居も東京にありましたから、何事もなければ私は秋工には縁がない一生を送ったかもしれません。それが、あの戦争で父の縁故を頼って秋田に疎開し、父の母校に入ることになったのですから、運命は不思議なものです。その父が秋工の誇る大先輩の一人、山本勇氏と同級生であったことを知り吃驚しました。ご承知のこととは思いますが、山本先生は東北帝大をご卒業後、東京工業大学教授、電気通信大学学長などを歴任された方で、理学博士号も有しておられました。

その先生が1949年頃(正確な日時不詳)母校を訪問されたのです。当時は東京工業大学の教授をされていたと思いますが、電気科実習工場をご見学後、講堂で秋工時代の思い出話しを交えながら、電子工学の展望についてお話をして下さいました。その頃、私は父を亡くしておりましたが、お帰りになる時、私は慶之助の息子ですとご挨拶すると、先生は父をよく覚えていて下さり丁重な励ましのお言葉を頂きました。感激するとともに、先生の謦咳に接することができたのは、在学中の忘れ得ぬ思い出となりました。

空手部(剛柔流)の回想

宇佐美　荘三
（昭和39年建築科卒）

空手競技は4年後の東京オリンピック種目に採用されましたが、私の在学中は対外試合の経験はなく、各個人が昇級を目的とした練習の毎日であったように思います。

通常は道場(練習場)があって、師範や監督が指導致しますが、当時の秋工空手部は上級生による指導方法でしたので手加減はなく、毎日の練習が厳しいため、退部した仲間が多数いました。

昇級試験が近くになって初めて、手形山にあった剛柔流の道場で師範の指導を受けた記憶があります。

空手部には部室がありましたが、道場は無く普段は中央校舎の中庭が練習場でしたので雨天時は教室の廊下とか、重量挙げ部の練習場の一部を借りる事で室内練習ができたように記憶しています。練習は黙祷を行い、5か条の訓示を合唱して、準備体操に入ります。最初の頃は、この準備体操が厳しくうめき声をあげる毎日でした。次に基本練習で突き蹴りの練習、移動練習を繰り返します。ここから空手部の感じの練習になります。

その後は型の練習、組手の練習になりますが、当時の剛柔流は防具を装着しないため、寸止め空手のルールに従いますので受け方を間違うと「ケガ」をすることになります(現在、組手の練習時は防具着用と聞いています)。

毎年、1月の末には恒例の寒中稽古がありました。雪道を裸足と稽古着1枚で旭川までランニングをし、冷たい水の中で基本の突き蹴りの練習を繰り返し行い、学校に戻りますが過酷な練習期間であったことを鮮明に記憶しています。剛柔流の基本型は撃砕(げきさい)、第二からサンチン(三戦)などの構成になり、ほとんど受け身になりますが、他にも様々な型があり奥が深いです。

私事ですが従妹(小学2年の女の子)が剛柔流の型で入賞しました。先が楽しみです。

ここで空手の流派の1つである剛柔流に付いて説明します。この流派の開祖の、沖縄出身の空手家：宮城長順さんが那覇手流に独自の研究を加え、1930年、自ら作った唐手の系統を「剛柔流」と命名したものです。遠距離からの攻撃が主流の松濤館流(しょうとうかんりゅう)とは違い、剛柔流は近距離から手で捌(さば)いたり打ったりする動作で身を守るため、受け身の訓練が主流になります。